

# Daily

## 五感をうごかし、モノを生みだし、ヒトとヒトをつなぐ人

日常の延長線上に松の湯があってほしい。このコーナーでは、黒石にゆかりのあるユニークな人の豊かな日常や想いを紹介し、松の湯が黒石の生活に織り込まれていくためのヒントを探っていきます。記念すべき1回目は、山口農園の山口輝利さんです。

山口農園を訪ねた日は、超大型台風直撃の日。山口さんは自宅で花卉やりんごの様子を見守っていました。りんごやお米などを有機肥料で栽培し、作物を卸すお店を自ら選び、商品もプロデュースしている山口さん。大雨の中、畑やビニールハウスを案内していただきました。

ハウス一面にトルコキキョウの蕾がふっくらと膨らんでいます。「これはトルコのアンバーダブルマロン。茶色でアンティークな雰囲気なので、おしゃれな家具屋さんや花屋さんなどに卸しています。」と、農協以外にも花屋さんへ直接販売していることを教えてくださいました。花卉に自分で値段を付けるようになってから、誰に花を買ってもらいたいかを考えるようになったとのこと。ほしい人のほしいものを作る。一見当たり前でも実行するのはきっと難しいはず。

はて、ハウスの隅に見つけた「イワシ」の文字。これは何ですか？「実は化学肥料が大嫌いで、海のものを入れて自分で肥料を作っています。ホタテの貝や魚かすなどを混ぜたりして。だって、まぐろとか皆好きですよ。植物にもいいはず」その有機肥料で作られたメロンとりんごジュースがとにかく美味い。メロンの香りが口いっぱいに広がります。りんごジュースは10



山口輝利（やまぐち・てるとし）さん/弘前市生まれ。山口農園を経営し、有機肥料でりんごや米、花卉などを栽培。

750円となかなか良いお値段で販売しています。「農家のくせに強気で（笑）、置いてもらうお店も選んでいます。価格の安いジュースは瓶代や絞り代、手間ひまを考えると利益になってないはず。りんごを捨てるよりはましですが・・・。」と、生産調整で作物を捨てるか知り合いに無料で配っている現状を憂っていました。

山口さんは2年前から、横町十文字まちそだて会という中心市街地活性化の取り組みに参加しています。黒石の食のイベントやまちあるきツアーなどを企画・実施している会です。「今はまだ農家同士のつながりが希薄ですが、農業技術以外の交流も深めて、さまざまな分野の人や外とのつながりを強くしたいです。農家の人も収入を少しでも得て、仕事にやりがいを感じるようにしていきたい。例えば松の湯でデザイナーと一緒に商品開発をしたり、新鮮な野菜をその場で調理して振る舞えたら楽しいですよ。」

雨が上がり、山口さんの取材を終えた帰り道、黒石のまちにかかる大きな虹を見かけました。農家の人にとっても松の湯が交流と創造の場になりますように。

### 編集後記

この度、「松の湯レター」が誕生いたしました。旧松の湯が新しい場所に生まれ変わる様子をお知らせする「News」をメインに、松の湯を見守ってきた方がその思いを語る「Voice」や、ユニークな黒石の方の日常を取り上げる「Daily」など、黒石の魅力をどんどんご紹介していきます。

5年前の夏。建築やまちづくりを勉強する学生が全国から青森県黒石市に集い、まちなか探索や市民の方と意見交換を通してまちづくりの提案をする4泊5日のワーク

ショップが建築学会主催で開催されました。当時学生として参加した私はそこで初めて松の湯を知り、その再生計画をグループの皆と発表しました。暑くて熱い5日間はあっという間で、市民の方からの美味しい差し入れを頼張り、地域の本音に夜通し耳を傾ける…忘れられない貴重な経験をさせてもらいました。

その後、社会人になった当時のメンバーとたびたび集まり、いま私たちができることは何？黒石には住んでいないけれど何ができる？おもしろいことしたいね、と余計

なお節介とも言える話し合いを東京で重ね、今後進んでいく松の湯の動きを「風の人」の視点で「土の人」に伝える広報誌を作成するアイデアが生まれました。多くの方のご協力の下、実現へとつながりました。Matsu no You レターは、いつでもあなたの参加をお待ちしています。次号もお付き合いいただけると嬉しいです。（津田）

松の湯レター 創刊号  
発行日：平成26年4月21日 / 発行：NPO まちづくりデザインサポート / 編集・執筆：津田純佳 / ロゴデザイン：小田洋介 / 協力：青木万里子、荒川佳大、齋谷祐介 / 後援：黒石市、黒石市教育委員会 / 問い合わせ先：NPO まちづくりデザインサポート 東京都世田谷区代沢 2-22-7 info@urbandesignsupport.com

## はじめまして、松の湯からのお便りです。 松の湯レター 創刊号

No.1 / 2014年4月

News：旧松の湯を「自分の場所」に。

Voice：名前知らなくたって風呂友達（前編）

Daily：五感をうごかし、モノを生みだし、ヒトとヒトをつなぐ人





# News 旧松の湯を「自分の場所」に。



旧松の湯が新しい場所に生まれ変わることをご存知ですか？

## 新しい「松の湯」がオープンします！

こみせが連なる趣きのある中町と夜は飲食店のネオンが輝く甲徳兵衛町がちょうど交差する場所に、大きな松の木が突き抜けた旧銭湯松の湯があります。銭湯は約 20 年前に営業を終了しましたが、平成 20 年度に文化庁の補助を得て市が買い取りました。そして、平成 27 年度に、「観光交流拠点」「地域コミュニティ再生」「地域の防災拠点」の 3 つを柱にした新しい「松の湯」がオープンする予定です。

風情のある中町は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、土日は観光客がちらほらとまち歩きを楽しんでいます。なかなか地元の人を楽しめる場所が少ない現状です。そこで、新しい「松の湯」を拠点に、外からやってくる“風の人”と地元の“土の人”が集うことができる場となるように計画中です。

## 銭湯はコミュニティの場

旧松の湯が現役の銭湯だった頃、自宅にお風呂がないため毎日銭湯に通う人が多かった、と高橋さんから伺いました（3 頁）。銭湯は、

近所の人とおしゃべりをして情報交換や物々交換をしたり、困ったことがあった時には人生の先輩に相談にのってもらえる大切な社交場、今で言うコミュニケーションの場であったようです。もちろん、お風呂上がりのコーヒー牛乳は楽しみの 1 つでした。

## 市内外の人の参加で進行中・・・

さて、そのような銭湯の良さを活かした旧松の湯再生計画案が、こみせ保存会や（社）青森県建築士会南黒支部、地元の子供達、全国から建築やまちづくりを勉強する学生が集まる合宿形式のワークショップ（日本建築学会主催のシャレットワークショップ）などから数多く出されました。

平成 22 年度に、これらのさまざまな計画案やワークショップをもとに、『誰もが「松の湯」を自分の場所にするために』という提言が市民公開のシンポジウムにおいてまとめられ、弘前大学の北原啓司教授（大学院地域社会研究科研究科長・教育学部住居学研究室）が中心となって本格的に再生計画が始動していきます。誰にとってもあずましい「松の湯」となるように、再生計画のプロセスそのものを市民参加で取り組んでいこうと、皆の想いと覚悟が共有されていきました。

## ふらっと行ける松の湯へ

その年の夏、実験的に松の湯を一般公開し、市民へアンケート調査を行う「こみせサロン」が建築士会南黒支部と北原研究室の協力のもと、約 3 ヶ月半開催されました。期間中は、久しぶりに中入って思い出がよみがえる人や子ども達の頃に憧れていた番台に座ってにやりと笑う大人、大きな浴槽での魚釣りを夢見る子どもなど、皆が思いを巡らし、週末には黒石高校のお話会や弘前大学のアカペラコンサートなどのイベントも開催され、大盛り上がりでした。

また、ワークショップという名もとの大掃除大会が開催され、障子の張り替えや中庭の雑草抜き、浴槽や外壁磨きなど、真夏の黒石で地元の人や弘前大学の学生たちが汗を流して取り組みました。

新しい「松の湯」が子どもから大人まで、皆が気軽に行きたくなる場所となることを



左上：こみせサロン開催中の様子/右上：お掃除ワークショップでタイル磨きに励む学生/左下：弘前大学アカペラサークルのライブ/右下：松の湯再生計画の市民公開の発表会

目指して…。 “土の人” が楽しんでいるからこそ、“風の人” も訪れたいくなるように、皆さんの参加をお待ちしています。具体的な運営体制や設計については次号から詳しくお伝えしていきます。どうぞお楽しみに。

## Voice

### 名前知らなくたって風呂友達（前編）

— 高橋家 14 代当主 高橋幸江さん

「松の湯」は、なんと言っても松がシンボル。銭湯だった頃は、家のお風呂が故障していたり、寒い日にはよく通っていたものよ。銭湯は脱衣所もお風呂場も温かいからね。まず午後 3 時におばあちゃん達が一番風呂に入って、夜は 10 時まで開いていたわ。今はお風呂がない家はほとんどないけれど、昔はそういう家がたくさんあったの。毎日通って、子ども達と一緒に飲むお風呂上がりのコーヒー牛乳が楽しかった。自分の家のお風呂とい

う感じで入っていたの。小銭がない時は、「入って入って、今日はいいから、明日まとめてでいいよ」ってね。そういう会話がいつも生活の中にあって、松の湯も自分の家のように感じていたわ。まちが自分のもんという感じ。お風呂上がりに長話していたら、「いつまで話しているんだ」と旦那さんが迎えに来ることもよくあった。

松の湯がなくなった途端、「松の湯」という言葉が会話からなくなった。新しくなったら、「松の湯」という言葉が復活することが一番嬉しい。全然別の名前になったら意

味がないと思う。松の湯は残したい大事な言葉。かたちが変わっても松の湯は松の湯だから。

黒石の人は銭湯や温泉に行くのが今でも当たり前。いつでも行けるようにシャンプーや石鹸をカゴに入れて車に置いておくの。毎日通うと風呂友達がいっぱいできるのよ。いつも大体決まった時間に入っているからね。風呂友達とお花見入ったり飲みに行ったりするけれど、実は名前を知らないなんてこともあるのよ。ふふ、おもしろいわね。（つづく）



高橋幸江（たかはし・ゆきえ）さん  
高橋家の 14 代当主。文化財の高橋家に住まい、「ラジオ体操 at かくじ広場」と「こみせウォーキング」が最近の日課。こみせやかぐじを日々の生活に楽しくアクティブに取り入れ、黒石の良さを守り伝える。



高橋家住宅：国指定重要文化財。江戸時代に建設され、黒石藩御用達の米問屋を営んでいた。